

中等教育地理における地域研究と主題研究

—— 中国の地理を事例として ——

磯 田 則 彦*

I はじめに

2008（平成 20）年および 2009（同 21）年の学習指導要領の改訂により、中学校社会科ならびに高等学校地理歴史科の地理の学習内容や方法に変化が生じた。中学校社会科においては、進展する知識基盤社会化やグローバル化の波を受けて、世界や日本について基礎的な教養を培い、国際社会に主体的に生き、公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力を育成することを目標としている（文部科学省，2008）。地理的分野についても、①基礎的・基本的な知識，概念や技能の習得，②言語活動の充実，③社会参画，伝統や文化，宗教に関する学習の充実の 3つを改訂の要点としている（文部科学省，2008）。これらの目標を達成していく過程で、世界の諸地域の地域的特色について学ぶ地誌的な学習の充実は重要である。また、さまざまな地域の調査を行い、系統地理的な視点も含めて、自分の解釈を加えて論述したり、授業においてクラス等で発表・意見交換するなどの学習活動も充実させる方向で考えられている（文部科学省，2008）。

また、高等学校地理歴史科においては、中学校社会科や高等学校公民科との

* 福岡大学人文学部教授

関連、および地理歴史科の世界史・日本史・地理の科目間のそれらも重要となる（文部科学省，2010）。そして、思考力・判断力・表現力等の育成に重きを置きながら、習得した知識、概念や技能を活用して課題を探究することが重視されている。地理については、地図を活用した学習を通じて地理的技能を身につけるとともに、世界の各地域の特色を理解したり、現代世界の諸課題を考察することで地理的な見方や考え方を培い、思考力・判断力・表現力等を育成することが求められる。具体的には、歴史的な背景を踏まえた考察や現代世界の諸地域の地理的な学習の充実などを通じて、より一層の地理的認識を深めることが望まれるとともに、学習方法にもそのような工夫が期待されている（文部科学省，2010；佐藤ほか，2013）

そこで、高等教育教職課程における地理の学習内容や方法についてもこれに即した一つの視点を提示してみたい。本稿においては、中等教育地理の学習の目標や内容、方法を意識したうえで、地理教育における主幹を形成する地誌的および系統地理的な学習内容について外国の事例で検討を行う。具体的には、隣国であり、かつ日本との歴史的な結び付きが強固な中国を取り上げる。同国のこの二十数年間の社会経済的な発展は世界的に注目されており、東アジア地域の劇的な変容、および経済のグローバル化¹⁾の進展に伴う世界各地の再編という文脈からもぜひ生徒・学生諸君に理解を深めてもらいたい地域である。

Ⅱ 中等教育における中国の地理の学習内容

中国については、中学校社会科の地理的分野においても、高等学校地理 A・B 両科目においても比較的多くの分量が割かれた地域としての扱いがなされている。現代世界の地誌的な考察の単元を中心として、地理歴史科においては系統地理的な考察の単元でもいくつかのトピックスの提供がなされている。

前者については、まず、大陸特有の変化に富んだ地形と気候に関する学習項

目あげられよう。日本の二十数倍という広大な国土の中に、「世界の屋根」と称される新期造山帯や古期造山帯の山々、日本数個分の面積を有するタクラマカン（塔克拉瑪干）およびゴビ砂漠、モンゴル・ロシア両国との国境地帯に延々と広がる大草原、チャンチヤン（長江）・ホワンホー（黄河）の「二大河川」に代表される大河とその周辺の大平原、日本の中学・高校生には馴染みのない（想像しがたい）地形および植生が目白押しである。また、風土の形成に強い影響を与える気候についても、前出の乾燥地帯を中心に見られる乾燥（BW・BS）気候や、チンツァン（青蔵）高原からヒマラヤ山脈にかけてのツンドラ（ET）気候、世界の寒極へと連なる亜寒帯冬季少雨（Dw）気候、「中国のハワイ」と呼ばれるハイナン（海南）島の熱帯（A）気候までバリエーションが豊かである。

また後者については、世界一の人口を抱える中国の人口政策や多民族社会としての特徴について話題提供がなされている。そこでは、人口抑制策としてのいわゆる「一人っ子政策」²⁾やマジョリティである漢族と政府公認の50を上回る少数民族の生活と文化などに焦点が当てられている。なかでも食生活に関しては、いわゆる「北京・上海・広東・四川の四大料理」を紹介するなど、日本でも馴染みのある「中華料理」と比較・検討することでわかりやすく食文化について触れている。

一方、「四つの現代化」にも含まれた、産業の柱となる農業や工業についても多くの分量を割いて考察を行っている。具体的には、13億人の食卓を支える農業について、「チンリン（秦嶺）山脈・ホワイ川（淮河）ライン」の北と南で主要農作物がどのように異なるのか、市場経済化が進展する中で農家・農業を取り巻く環境がどのように変化してきたのかなどが論じられている。工業についても、1970年代後半以降の改革・開放政策の進展のなかで、経済特区や多数の経済技術開発区等の経済開放都市がどのように形成され、発展してきたのが記されている。

さらに、比較的新しいトピックスとしては、経済成長に伴う地域格差や環境問題の現出、西部および東北部での地域開発、高速交通体系の整備（航空ネットワークや高速鉄道など）、人々のライフスタイルの変化などが取り上げられている。

Ⅲ エリア・アイデンティティとしての地名

ところで、中等教育で使用される地図帳・教科書をはじめとする教材においては、中国の地名表記に関していろいろと考えさせられるところがある³⁾。この地名表記については、基本的にカタカナ表記に日本の漢字表記が併記される形式を取っている。すなわち、ペキン（北京）・ナンキン（南京）等である。しかしながら、現地を訪れてみると、ほとんどすべての中国人が「ペキン」・「ナンキン」とは言わず、「ベイジン」・「ナンジン」と呼んでいることに気づかされる。英語圏（アメリカ・イギリスなど）や朝鮮語圏（韓国）等でも中国語の声調こそドロップするが同様である。これを受けてか、近年の地図帳の中には「ペキン（ベイジン）」の併記が見られるものもある⁴⁾。「ホンコン（シアンカン）」も同じであろう⁵⁾。

外国語地名に関しては、中国語に限らず、どの言語についても多かれ少なかれカタカナ（日本語）表記に転写することに無理があるが、当該地域の特徴を考察するにあたり、正しい地名表記・呼称とその意味するところを理解しておくことはまさに第一歩的作業と言えるのではないだろうか。この点において、中国の地名に関してはまさに要注意であろう。

もちろん、検定済みの地図帳や教科書に記載されている地名は統一的な基準の下でそのように表記されているのであるから、そのこと自体に問題はないと判断される。しかしながら、実地調査等で現地に赴いた際に話し言葉としてまったく通じないというのも考えものである。とはいえ、もともと五十音とその組

第1表 中国地名のカタカナ表記例

省名等の地図帳表記（左側）と カタカナへの転写表記・簡体字（右側）	省都等の地図帳表記（左側）と カタカナへの転写表記・簡体字（右側）
ホーベイ（河北） ホーベイ（河北）	シーチャョワン（石家荘） シージャァョワン（石家荘）
シャンシー（山西） シャンシー（山西）	タイユワン（太原） タイユァン（太原）
リャオニン（遼寧） リャオニン（遼寧）	シェンヤン（瀋陽） シェンヤーン（沈阳）
チーリン（吉林） ジーリン（吉林）	チャンチュン（長春） チャンチュン（長春）
ヘイロンチャン（黒竜江） ヘイロンジャン（黒竜江）	ハルビン（哈爾濱） ハァーピン（哈尔滨）
チャンスー（江蘇） ジャンスー（江蘇）	ナンキン（南京） ナンジン（南京）
チョーチャン（浙江） ジュウジャン（浙江）	ハンチョウ（杭州） ハンジョウ（杭州）
アンホイ（安徽） アンフイ（安徽）	ホーフェイ（合肥） フーフェイ（合肥）
フーチエン（福建） フーヰエン（福建）	フーチョウ（福州） フージョウ（福州）
チャンシー（江西） ジャンシー（江西）	ナンチャン（南昌） ナンチャン（南昌）
シャントン（山東） シャンドン（山東）	チーナン（済南） ジーナン（済南）
ホーナン（河南） ホーナン（河南）	チョンチョウ（鄭州） ジェンジョウ（鄭州）
フーベイ（湖北） フーベイ（湖北）	ウーハン（武漢） ウーハァン（武汉）
フーナン（湖南） フーナン（湖南）	チャンシャー（長沙） チャンシャー（长沙）
コワントン（広東） グワンドン（广东）	コワンチョウ（広州） グワンジョウ（广州）
ハイナン（海南） ハイナン（海南）	ハイコウ（海口） ハイコウ（海口）
スーチョワン（四川） スーチュワン（四川）	チョントゥー（成都） チャンドゥー（成都）
コイチョウ（貴州） グイジョウ（貴州）	コイヤン（貴陽） グイヤン（贵阳）
ユンナン（雲南） ユンナン（云南）	クンミン（昆明） クンミン（昆明）
シャンシー（陝西） シャンシー（陝西）	シーァン（西安） シーァン（西安）
カンスー（甘肅） ガンスウ（甘肅）	ランチョウ（蘭州） ランジョウ（兰州）
チンハイ（青海） チンハイ（青海）	シーニン（西寧） シーニン（西寧）
（自治区）	
内モンゴル（内蒙古） ネイモングウ（内蒙古）	フホト（呼和浩特） フーホーハァオト（呼和浩特）
コワンシーチョワン族（広西壮族） グワンシージョワンズー（広西壮族）	ナンニン（南寧） ナンニン（南寧）
チベット（西藏） シーザーン（西藏）	ラサ（拉薩） ラーサー（拉萨）
ニンシャホイ族（寧夏回族） ニンシャァフイズー（宁夏回族）	インチョワン（銀川） インチュワン（银川）
シンチャンウイグル（新疆維吾爾） シンジャンウエイウァール（新疆維吾爾）	ウルムチ（烏魯木齊） ウールムーチー（乌鲁木齐）
（直轄市／直轄市）	
ベキン（北京） ベイジン（北京）	
テンチン（天津） ティエンジン（天津）	
シャンハイ（上海） シャンハイ（上海）	
チョンチン（重慶） チョンチン（重慶）	
（特別行政区および台湾／特別行政区与台湾）	
ホンコン（香港） ホンコン・シャンガン（香港）	
マカオ（澳門） マカオ・アォメン（澳門）	
タイワン（台湾） タイワン（台湾）	タイペイ（台北） タイペイ（台北）

注：日本語に精通しているネイティブスピーカー（標準中国語）の音を筆者がカタカナに転写した（各列右側）。前述のとおり、転写の正確性にはさまざまな見解があるものと判断される。とりわけ、中国語の母音のうち「e」と「u」の転写表記は困難をきわめた。具体的には「ホーベイ（hebei）・ホーナン（henan）」、「フーベイ（hubei）・フーナン（hunan）」などがこれにあたる。実質、転写した音をそのままカタカナ読みしても現地では通じない。

資料：現地の地図等

第2表 本稿で使用した地名について

地図帳・教科書表記	カタカナへの転写表記の試み	初出箇所
タクラマカン (塔克拉瑪干) 砂漠	タクラマガン (塔克拉瑪干) シャームー	3頁
ゴビ砂漠	ゲービー (戈壁) シャームー	3頁
チャンチャン (長江)	チャンジャン (長江)	3頁
チンツァン (青蔵) 高原	チンザン (青蔵) ガオユアン	3頁
大シンアンリン (興安嶺) 山脈	ダーシンアンリン (大興安嶺) シャンマイ	7頁
チーリエン (祁連) 山脈	チーリエン (祁連) シャンマイ	7頁
パンチン (盤錦)	パンジン (盤錦)	11頁
シェンチェン (深圳)	シェンジェン (深圳)	12頁
チューハイ (珠海)	ジューハイ (珠海)	13頁
アオメン (澳門)	アォメン (澳門)	13頁
コワンアン (広安)	グワンアン (広安)	14頁
チュー川 (珠江)	ジュージャン (珠江)	15頁
トンコワン (東莞)	ドングワン (東莞)	15頁
チョンシャン (中山)	ジョンシャン (中山)	15頁
ホイチョウ (惠州)	フイジョウ (惠州)	15頁
チアンメン (江門)	ジャンメン (江門)	15頁

注：第1列中の漢字表記は日本語。第2列中のそれは中国語（簡体字）を表す。

また、地図帳・教科書において概してカタカナ表記が確認できない地名については、本稿中で直接カタカナへの転写表記を試みている。第1表と同様に、転写の正確性にはさまざまな見解があるものと思われる。

み合わせの中のない音を無理矢理カタカナ表記に転写してみても、結局は正しい音・表記とは言えない。したがって、あくまで参考程度のものにとどまるが、たとえば、省・省都名等を本来の中国語の音に近づけてカタカナで表記してみようと努力した場合、どのようになるのかを第1表にまとめてみた⁶⁾。

ただし、中国の地名に関しては、いくつかの点で注意を要するところがあることを予め述べておきたい。すなわち、前述の少数民族の居住地域の地名表記である。チベット（西藏）自治区を除けば、同国の各省・自治区の民族構成に占める漢族の比率は圧倒的に高いか、あるいは近年ほど顕著に高まっていると

いえる。このような状況下、他の要因も含めて都市・県等⁷⁾の地名には標準中国語により表されたものが多いことに注意が必要である。また、同じ漢族でも言語が異なる南部については、現地語と標準中国語の双方の音が存在するものもある。

Ⅳ 自然地理的主题—内陸の大草原地帯の形成と種類—

広大な中国の自然環境の特徴は、一言で表現すればその多様性であろう。本章においては、これらのうち、内陸の国境地帯に広がる大草原地帯を取り上げてみたい。チャンチヤン（長江）やホワンホー（黄河）の中下流域に広がる大平原とは異なり、内陸の大草原地帯は人口密度の低い乾燥地帯に広がっている。それだけに日本からアクセスしにくい。この大草原地帯は、大まかに言って、大シンアンリン（大興安嶺）山脈・インシャン（陰山）山脈・チーリエン（祁連）山脈（河西回廊の北西側）に囲まれた地域に位置する。ここには一部ゴビ砂漠も重複して分布しており、まさに気候上乾燥・半乾燥地帯（BW・BS 気候区）の特色を有する。

優に数百キロにわたって延々と連なる大草原地帯について、日本の生徒・学生諸君は、あたかも阿蘇の草千里の拡大・巨大版のように連想してしまうかもしれないが、実際には内陸の大草原地帯は地形上・植生上単一の様相を示しておらず、主として3つのタイプの「草原」から成り立っている（写真①参照⁸⁾）。広大なユーラシア大陸内部の大草原の醍醐味とも言えようか。

第3表に示したように、主として相対的な降水量の多少や地形に応じて、①乾いた土地に草が延々と生い茂るタイプの草原（草地草原）⁹⁾、②湿地を伴うタイプの草原（草甸草原）、③「ゴビ（ゲービー）」と呼ばれる荒れ地タイプの草原（戈壁草原）¹⁰⁾に概して分類されてきた。これらのうち、①がまさに日本で連想されがちな草原であり、比較的安定した降水量が得られる地域に発達



写真① 内モンゴル自治区北東部の草地草原（2014年筆者撮影）

第3表 内陸（国境地帯）大草原の分類例

草原のタイプ	主な分布域
① ツアオディ ツアオユアン（草地草原）	内陸中部～東部
② ツアオディエン ツアオユアン（草甸草原）	内陸東部
③ グービー ツアオユアン（戈壁草原）	内陸中部～西部

資料：現地での聞き取り調査等による。

している（ただし、年による変動があり、草の生い茂り方にはバラツキがある）。地形的には、平坦地や緩やかな丘陵地が主となっている。また、②は放牧の際に牛馬や羊（ラクダの場合もあり）が食む草とともに飲み水も供給してくれる草原であり、大草原地帯の東部、大シンアンリン（大興安嶺）山脈の周辺、とくに東側に多く見られる。一方、③は降水量の少ない乾燥地帯に位置する「半分荒れた草原」であり、同地帯の中西部に典型的に見られる。草原の存続が危ぶまれる、植生に対する危機感が強い「草原」である（草原とは見なされない

研究例もあろう)。

これらの草原は①・②を中心に毎年6月から7月をピークに草が生い茂るが、ユーラシア大陸の内陸部かつ緯度が比較的高い位置にあるため厳冬期は雪原に姿を変える。

V 人文地理的テーマ—農業地域と経済特区—

1. 農業地域

—「チンリン（秦嶺）山脈・ホワイ川（淮河）ライン」の捉え方—

中国の農業地域については、従来、同国東部の主要農業地域を「チンリン（秦嶺）山脈・ホワイ川（淮河）ライン」により南北に区分する学習内容が一般的である。すなわち、華中・華南を中心とする水稲作地帯と東北・華北を中心とする畑作地帯である。昔からよく使われてきた学習法であり、現在の教科書・地図帳にもこの種の説明・主題図が用いられている。

近年の中国においては、農業においても市場経済化が進展しており、利益追求型の農業経営が行われている。たとえば、米作りについていえば、品種改良などの技術革新と大消費地の存在を背景に、従来主要水稲作地域として位置づけられることのなかった東北地方においても大規模栽培がさまざまな地域で行われている。とりわけ、ハイロンチヤン（黒竜江）省の平原地帯やリヤオニン（遼寧）省の主要河川沿いの地域においては、ジャポニカ米や「シャンミー（香米）」と呼ばれる高品質米の栽培が盛んに行われているところもあり特筆される。

このようにいうと、東北地方においては近年水稲作が伝播・拡散したかのようと思われるが、私たちが考えるよりもずっと昔から水稲作は当地で行われており、米食の習慣も存在したと現地で聞いている。したがって、歴史的な検証・考察が必要である。これについては、本稿においては詳細を語ることはできないが、いくつかの点について言及しておきたい。

まず、中国国内での各種研究より、古代より現在の華北・東北地方にあたる地域で水稲作が行われていたとする考古学的な資料が得られている。もちろん、長江流域や南部に比べるとそのような地点の数は少ないが、現在のリャオニン（遼寧）省にあたる河川沿いで水稲作の遺跡が見つまっているという報告もある（久馬，2012）。朝鮮半島への陸路での経路にあたる渤海および黄海沿岸部も含めて、現在の東北地方は長らく騎馬民族（狩猟民族）のテリトリーにもなっていた。加えて、気候的にも冬が厳しく、降水量が少ない東北部は水稲作を行うには条件が厳しかった。しかしながら、とりわけ清代以降においてこの地で水稲作は着実な広がりを見せてきた。そこには、国内からの移民（山東が多い）や水稲作を行う少数民族（朝鮮族）の存在、日本からの開拓移民の流入などが密接に関係している。

とりわけ、今世紀に入ってからは、改革・開放の加速の中で所得水準が著しく向上し、国内市場の拡大とジャポニカ米および高品質米の需要の高まりをみてきた。ハイロンチヤン（黒竜江）省を主とする東北地方はいまや国内の作付面積および生産量の15%程度を占める（2015年）とともに、国内屈指のジャポニカ米および「ブランド米」（高品質米）の生産地となっている。

さて、ここで生徒・学生諸君にいわゆる「調べ学習」の課題を提示してみたい。第4表に課題と「調べ学習」後に示すいわば解答例なるものをまとめてみた。ここでは、複数名でのグループ調査・発表（プレゼン）がより好ましいと考えられる。また、日本の米作りと比較してみるのも興味深いと思われる。

東北地方においては、最も南に位置し気候的条件が比較的厳しくなく、かつ大消費地への近接性が高いリャオニン（遼寧）省が水稲作に有利との見方が多数を占めると思われるが、実際には最北のハイロンチヤン（黒竜江）省の作付面積・生産量が圧倒的に大きい（第4表）。なお、同省の作付面積は全国3位、生産量は同2位である。この地域を含めた東北地方の米の種類はほとんどすべてがジャポニカ米である。

第4表 東北3省の米作りと高品質米栽培の条件

(課題)			
①どこ（どの省）が多いのか？			
②南部と比較してどのような特徴が見られるのか？			
(米の作付面積（左）および米の生産量（右）：2015年）			
1位	ハイロンチヤン（黒竜江）省	3,148	2,199
2位	チーリン（吉林）省	762	630
3位	リヤオニン（遼寧）省	545	467
(高品質米の栽培条件)			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 養分に富んだ豊富な（清）水の存在 ・ 病害虫が少ない → 農薬の使用量が相対的に少ない ・ 土壌汚染が比較的進んでいない ・ 寒冷な気候に合った品種の開発 など 			

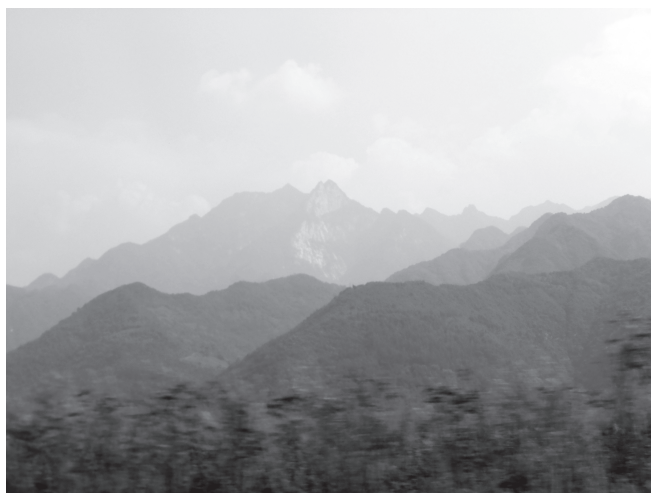
注：作付面積は千 ha。生産量は万トン。

ハイロンチヤン（黒竜江）省の作付面積は全国3位、また生産量は同2位である。

資料：「中国統計年鑑」および中国や農林水産省のホームページによる。

加えて、いわば中国版「ブランド米」（高品質米）の多くが東北地方において栽培されている。「ブランド米」のうち最高品質との評価もある「パンチン（盤錦）大米」や「シャンシュイ（响水）大米」はリヤオニン（遼寧）省やハイロンチヤン（黒竜江）省の水田地帯で収穫されるものであり、先のペキン（北京）オリンピックの専用米や国家調達米に指定された。このように、東北地方の水稲作は量的な面もさることながら、全国屈指のジャポニカ米および高品質米の生産という点できわめて特徴的である。このようなトピックスは、中国の農業の実態を正確にとらえるために必要不可欠であろう。

本節の最後に前述の「チンリン（秦嶺）山脈・ホワイ川（淮河）ライン」について若干補足しておきたい。中国主要農業地域の南北の区分線として長年用いられてきた同ラインのうち、前者のチンリン山脈は水稲作地帯と畑作地帯を隔てるのみならず、かつては地域間での文化的特徴を分ける「障壁」の役割も



写真② 西安郊外から見たチンリン山脈（2013年筆者撮影）

果たしてきた。写真②に映し出される同山脈は幾列もの山々が連なる交通の障壁であり、山脈の北と南の交流を困難なものにしてきた。前述のとおり、中国語はそのバリエーションが非常に大きな言語のひとつであり、同国南方においては、昔から「ひと山越えれば言葉が違う」、「村ごとに言葉が違う」とさえ言われてきた。実際、チンリン（秦嶺）山脈周辺の言葉には標準中国語とはかけ離れた言葉が存在し、地元の人々でなければ直ちに意思の疎通が図れないほどである。障壁としてのチンリン（秦嶺）山脈は言語にとどまらず、生活習慣・文化的背景を異にする地域を分け隔ててきた。農業区分線としての機能にのみ着目するのは惜まれる。

2. 経済特区—「改革・開放の先駆け」シェンチェン（深圳）—

1970年代後半に始まる改革・開放政策の中核となった経済特区の中でもシェンチェン（深圳）は、鄧小平（ドゥン・シャオピン）氏の同政策推進の原動力であり、改革・開放の象徴である。改革・開放路線の継承と加速を促した、

1992年の「ナンファンタンホァー（南方談話）〔別称：南巡講話〕」の舞台の1つとなったことでも有名である¹¹⁾。

経済特区は、1980年に設置されたシェンチェン（深圳）・チューハイ（珠海）・アモイ〔シャメン・シアメン〕（廈門）をはじめとし、その後スワトウ〔シャントウ〕（汕頭）およびハイナン（海南）省を加えた5つの地区である¹²⁾。

ここで、前章と同様に、「調べ学習」の機会を設けたい。これら5地区はいずれも同国南部に位置し、かつ特定の省に存在するが、なぜこのような地域に設置されたのであろうか。

肝要な点のみを第5表にまとめてみた。シェンチェン（深圳）・チューハイ（珠海）はホンコン〔シアンカン〕（香港）・マカオ〔アオメン〕（澳門）に隣接し、アモイ〔シャメン・シアメン〕（廈門）は台湾との近接性が選定事由である。スワトウ〔シャントウ〕（汕頭）は多くの華僑を送り出してきた街であり、ハイナン（海南）島は東南アジア華僑の投資を期待して経済特区に指定された。

「調べ学習」に際しては、現在あるいは1980年代以降の動向（結果）のみを追うのではなく、文化大革命終結後の中国共産党の政策の大転換についてしっかりと理解しなければならない。また、その中でキーパーソンとなった鄧小平氏の人物像や考え方についても同様に理解しなければならないであろう。これらの作業を抜きにして改革・開放政策やその原動力となった経済特区の役割や

第5表 5つの経済特区（「五大経済特区」）の地理的特徴

経済特区	地理的特徴
シェンチェン（深圳）	ホンコン（香港）に隣接
チューハイ（珠海）	マカオ（澳門）に隣接
アモイ（シャメン・シアメン）（廈門）	台湾に近接
スワトウ（シャントウ）（汕頭）	多数の華僑の送出处
ハイナン（海南）省	東南アジア華僑・華人の投資に期待

資料：中国のホームページ等を参照

特徴は決して理解できないからである。

第6表は、鄧小平氏に関する一種の「略年表的なもの」である。1904年、現在のスーチョワン（四川）省コワンアン（広安）市に生まれた同氏は、16歳でフランスに留学し共産党に入党する。帰国後は、国民党との内戦を経験し、「新中国」建国後は副総理や党総書記の要職に就いた。「新中国建国の父」と呼ばれた毛沢東（マオ・ツウードン）氏が始めた文化大革命で失脚するが、同氏が亡くなった翌年の1977年に復権した。鄧小平氏は、幾度もいわば「政治の表舞台」から姿を消すものの、やがて信望を集めて党副主席・副総理等の座に就くことになる。現実主義者として知られる同氏は、1978年には改革・開放路線を決定し、「先富論」を掲げて社会主義体制のなかに一部市場経済を導入

第6表 鄧小平氏と改革・開放政策の展開

1904年	現四川省広安市に生まれる
1920年	フランスに留学
1949年	「新中国」建国
1966年	文化大革命の開始
1976年	毛沢東氏死去・四人組の逮捕（翌年、文化大革命の終結を宣言）
1977年	共産党中央委員会総会で鄧小平氏復権 広東省視察
1978年	「港澳経済考察報告」（国家調査チームレポート） 訪日 シンガポール等東南アジア諸国訪問 改革・開放路線決定
1979年	訪米 「輸出（出口）特区」改め「経済特区」の呼称を提案（翌年、改称） 広東・福建（特区4都市）に関する調査レポート（正式提案・決定）
1980年	経済特区設置
1984年	深圳・珠海を設置後初視察 香港返還合意
1989年	民主化要求運動および「六・四」天安門事件発生
1992年	南方談話および社会主義市場経済体制の確立
1997年	鄧小平氏死去（2月） その後香港返還（9月）
2004年	深圳中国初の農村部・農民のない城市となる

資料：中国のホームページ等を参照

する試みを行う。シェンチェン（深圳）は、言うなれば、その「実験場」であった。では、「当時のシェンチェン（深圳）はどのような街だったのか？なぜシェンチェン（深圳）が選ばれたのか？」。というのも、1970年代後半には「シェンチェン（深圳）市」なるものは存在せず、「バオアン（宝安）県」¹³⁾というものがあつたからだ。ぜひとも、「調べ学習」のトピックスの1つに含めたい。鄧小平氏の国の舵取りには、元来中国の領域であつたホンコン（香港）とマカオ（澳門）の経験を1つのモデルとする考えが根底にあつた¹⁴⁾。この点はきわめて重要であろう。

順調に進められてきた改革・開放政策であつたが、1980年代末にその速度を緩めることになる。「六・四」天安門事件に代表される民主化要求運動の影響である。その後、3年近くの歳月を経て、前記の「ナンファンタンホァー（南方談話）〔別称：南巡講話〕」が同氏により行われた。これは、「社会主義体制の堅持と一部市場経済の導入」を是とし、改革・開放路線を継承・加速させていくことを確認したものである。中等教育地理の学習の中では必ずしも取り上げられないトピックスであろうが、1990年代中頃以降の同国の顕著な経済成長と変化を考えていくうえで決して欠くことのできないものである。

本節の最後に、現地調査によるシェンチェン（深圳）の現況について若干触れておきたい。中国南部において、同市はコワンチョウ（広州）市とともにこの地域の経済の中心的な存在となっている。カントン（広東）省のチュー川（珠江）デルタ地帯は、両市を核に、経済特区のチューハイ（珠海）や工業都市のトンコワン（東莞）、ほかフォーシャン（仏山）・チョンシャン（中山）・ホイチョウ（惠州）・チアンメン（江門）などの大中諸都市が犇めく同国の「一大経済地域」となっており、ホンコン（香港）・マカオ（澳門）に隣接ないしは近接している。現在のシェンチェン（深圳）市域の人口は優に1000万人を上回っており、高層ビルが建ち並ぶ洗練された中心業務地区（フーティエン（福田）CBD）の景観や、路線が拡張し続け高い利便性を有するメトロ（深圳地铁）



写真③ 蛇口港海上から見た深圳の街並み（2014年筆者撮影）

は、まさに「先進国の大都市」の特徴と一致している。また、陸路・海路による隣接するホンコン（香港）・マカオ（澳門）との近接性の高さも特筆される（写真③参照）。

Ⅵ おわりに

本稿においては、中等教育地理の学習内容と方法について、近年の学習指導要領の改訂に照らして新たな視点の提示を試みた。大学の教職課程において社会科および地理歴史科の授業を展開する際に、どのような新たな枠組み・視点をもつことが大切であるのかを検討してみた。

事例地域は、日本との歴史的な結び付きが強固な隣国であり、かつ進展する経済のグローバル化において重要な位置づけにある中国である。中等教育の地理教育において重要な方法論となる地誌的および系統地理的考察双方の観点からいくつかのトピックスを選択し、新しい学習指導要領で目標としている「地

理的な見方・考え方」に即して学習内容・方法について検討を加えた。

結果は、以下のように要約される。

① エリア・アイデンティティを考える上で重要な地名については、日本語のカタカナへの転写表記にあたり、現地の音とのずれが少なからず認められる。音の特徴や種類が大きく異なる言語を十分に日本語で表すことは不可能な作業であるが、より適切なカタカナへの転写表記が求められるのは論を待たないであろう。本稿においては言及する機会を得なかったが、いわゆる「メディア地名」（たとえば、新聞・旅行ガイド等）との比較・検討を試みるのも一案である。

② 自然地理的な観点からユーラシア大陸内陸部の大草原地帯の特徴を検討し、3つのタイプの「草原」について言及した。同地帯は、主として降水量や地形の差異などにより、①乾いた土地に草が延々と生い茂るタイプの草原（草地草原）、②湿地を伴うタイプの草原（草甸草原）、③「ゴビ（グービー）」と呼ばれる荒地タイプの草原（戈壁草原）に概して分類されてきたことがわかった。自然環境の多様性に着目したい。

③ 人文地理的な観点から中国の農業について、従来の「チンリン（秦嶺）山脈・ホワイ川（淮河）ライン」に関して、とくに東北地方での水稲作について新たな視点の提示を試みた。華中・華南を中心にインディカ米の生産量が圧倒的に多い同国において、東北地方はジャポニカ米および、いわば「中国版ブランド米」（高品質米）の生産に大きな特徴が求められた。中等教育課程においては、あまり言及されていないトピックスと思われるが、改革・開放以降変化し続ける中国の農業と生活様式を考察する上で重要な視点を提示してくれるものと考えられる。

④ また、改革・開放政策の原動力である南部の経済特区について、同政策の象徴ともいえるシェンチェン（深圳）の経済的發展と大都市化に関して同様の試みを行った。その際には、中国共産党の政策の大転換とキーパーソンとなる鄧小平氏について歴史的な流れ・視点を交えて考察を行った。新しい学習指

導要領が求める学習方法と判断される。

⑤ 以上の作業を通じて、世界の諸地域について、中国を事例として、地誌的かつ系統地理的な観点から総合的に地域の特徴を考察するとともに、新たな学習内容・方法について1つの試みを提示することができたものとする。

最後に、本稿においては、紙面の都合により、中等教育地理の新学習指導要領に対する新たな視点の提示の試みについて、自然地理的・人文地理的および地誌的な学習の観点から特定のトピックスの提示しかなしえなかったことを述べておかなければならないであろう。中国の地理に関しては、他にもさまざまな視点から考察すべき話題が多数存在することは間違いない。他の外国地域も含めて、別稿において検討する機会が得られれば幸いである。

注

- 1) 中国とグローバル化（中国語でいう「全球化」）については、飯島・久保・村田編（2009）において詳しく論じられている。また、佐々木（2006）は、現代中国におけるグローバル化と構造転換について考察を行っている。
- 2) 2015年10月の共産党第18期中央委員会第5回総会において、「計画生育」の廃止が決定された。
- 3) この点については、明木（2014）において詳細な検討が行われている。
- 4) 帝国書院編集部編「新詳高等地図（2015年）」参照。
- 5) 二宮書店編集部編「基本地図帳（2015年）」参照。ただし、筆者には「シャンガン」の方が近い音に聞こえる。
- 6) また、第1表中にない本稿で用いた地名についても、第2表中に同様にまとめてみた。基本的に本文および注、その他の表中の地名表記については、中等教育において用いられている地図帳および教科書のそれらにしたがった。
- 7) 中国の行政域は、省のもとに「市（shi）」と「県（xian）」が並列に設置されている。前者は全国レベルの「地級市（dijishi）」と省レベルの「県級市（xianjishi）」に分類でき、「地級市」には概して「県級市」や「県」が複数含まれる。なお、「直轄

市 (zhixiashi)」は別格で省と同格である。一方、「県」には政府公認の少数民族の「自治県」なども含まれている。基本的に、「県」よりも「県級市」が、「県級市」よりも「地级市」が位置付けが上となる。

- 8) これらのほか、中国では「シューリン ツァオユアン (疎林草原)」・「シャンディ ツァオユアン (山地草原)」・「シャンディ ツァオツォン (山地草叢)」・「ガオハン ツァオユアン (高寒草原)」などがある。
- 9) 「ピン ツァオユアン (平草原)」ともいう。
- 10) 全国的には「ホワンモウ ツァオユアン (荒漠草原)」といわれる。
- 11) このほか、ウーチャン (武昌)・チューハイ (珠海)・シャンハイ (上海) の3都市がある。期間は1992年1月18日から2月21日までであった。
- 12) 近年、このほかにシンチアンウイグル (新疆維吾爾) 自治区のカーシー (カシュガル) (喀什) [2010年] とホォアグォスー (霍尔果斯) [2014年] の国境都市に経済特区が設置されているようである (中国のホームページ参照)。2013年からの「一帯一路」経済圏構想との関係から捉えられよう。
- 13) 現在の国際空港がある地区であり、港湾のあるシュウコウ (蛇口) (写真③) とともに同市西部に位置する重要な工業地域となっている。
- 14) 鄧小平氏は、改革・開放政策決定前後に日本やアメリカを訪れており、そこで資本主義経済に直接触れている。訪日・訪米が同氏の政策に影響を与えた可能性が指摘されている。また、留学時の寄港地となったシンガポールのその後の発展を訪日とほぼ同時期に見た同氏は、華人社会に一つのモデルを求めたのかもしれない。なお、中国と華人社会とのネットワークについては、濱下 (2013) に詳しく論じられている。

参考文献

- 明木茂夫 (2014) : 中国地名カタカナ表記の研究. 東方書店, 392p. (表記一覧・附論 50p.)
- 飯島 渉・久保 亨・村田雄二郎編 (2009) : シリーズ 20世紀中国史—3 グローバル化と中国. 東京大学出版会, 230p.
- 久馬一剛 (2012) : 中国における古代稲の時空的分布とその意義 (翻訳). 肥料科学, 第

- 34号, 93-108. (Gong Zi Tong, Chen Hong Zhao, Yuan Da Gang, Zhao Yu Guo, Wu Yun Jin, Zhang Gan Lin (2007) : The temporal and spatial distribution of ancient rice in China and its implications. *Chinese Science Bulletin*, vol.52. no.8, pp.1071-1079.)
- 佐々木 衛 (2006) : 現代中国におけるグローバル化と構造転換—「基層構造」パラダイムからみた農村—都市連関構造の展開—. (北川隆吉監修／北原 淳・竹内隆夫・佐々木 衛・高田洋子編著『地域研究の課題と方法—アジア・アフリカ社会研究入門〔実証編〕』文化書房博文社, pp.85-101. 所収)
- 佐藤 徹編著 (2013) : 新しい社会科教育法. 東海大学出版会, 156p.
- 濱下武志 (2013) : 華僑・華人と中華網—移民・交易・送金ネットワークの構造と展開—. 岩波書店, 331p.
- 文部科学省 (2008) : 中学校学習指導要領解説—社会編— (平成 20 年 9 月 (平成 26 年 1 月一部改訂)). 日本文教出版, 161p.
- 文部科学省 (2010) : 高等学校学習指導要領解説—地理歴史編— (平成 22 年 6 月 (平成 26 年 1 月一部改訂)). 教育出版, 169p.